Vol. 1 No. 3 THE TAIRIKU SUPPLEMENT TO THE TAIRIKU NIPPO September 10th 1931

隔週大陸

（第三號）
大陸日報附錄
編輯人 山崎寧

開拓時代物語
ステブストンの巻（三）

さて兎に角病院の建物は出來たのであるが、看護人がなくてはならぬ、そこで會堂建築について非常な心力を盡したキリスト教關係の人々が、その餘暇にこの大役を引受ける事になつたのであつた。看護人が出來てくると、今度は經營維持を何うしてするかと云ふ問題が一間にふりかゝつて來た、これは人員の增加から遲かれ早かれ起らなくてはならぬ問題であつたに相違ない。

遠く既往十年に遡つて顧みるに當漁場における我邦人漁師なる者は至つて少數にして、僅かに十を以て算するを得るに止まりしも、年一年其好況を聞知し相次いで蝟集し來るもの千餘の多きに及び、殊に本年の如きは春以來その出稼を停止せし結果彼等[illegible]方向を轉じ[illegible]は合衆國に轉じ、毎船晩香坡又はビクトリアに上陸する者無慮數百然して彼等は那邊の方面に於て業を執らんとするか、素より身に定職なく、且つは英語不通の悲如何ぞ白皙人種と共に競爭場裡に立つて拮抗するを得ん勢ひ當地に來て漁獵に從事せざるべからず、即ち三々五々相携へて入込み來り、例年は漁期既に迫るも漁師に不足を感ぜしもの本年は五月に於て夙くに三千の漁師を見るに至り、尚日々其數を增加して底止する處を知らず前途甚だ憂慮すべきものありとし加ふるに彼等は嚢裡蓄ふる所多きも三十金を超へず甚だしきに至りては無一物の輩さへありて喰ふに食なく、寢るに家なく之を大にしては我帝國の國威を毀損し、又之を小にしては其の窮狀眞に憐れむべく、若し不幸にして一朝病魔の襲ひ來る事あらんか、如何にして之を治するの途を得ん

これは同じ第一年度報告中に記述されて居るものであるが、この問題の解決が直接間接今日の團体創立の原因になつた事は明かなことであらう。

有栖川宮殿下御通過

一八九七年、既に此の頃シーピーアールはエムプレス船を以て東洋との航路を開いて居たが、然し當時の晩香坡は、漸くギャス・タウンから拔け出した許りの寂しい田舍町であつた。此の小さな町へ日本の皇族有栖川宮威仁親王殿下がお出でになると云ふのであるから、上を下への大騷ぎを演じたのも無理はなかつた。殿下が御到着になつたのは一八九七年もう暑い夏も去つて、そろ〳〵秋風が吹き出し始めた八月三十一日の事であつた。同盟國たる英國皇帝陛下の御即位六十年祝典に、日本の天皇陛下の御名代として御參列になつてお歸りであつたが、在留日本人の歡び様と云つたらなかつた。

苟も晩香坡を知つて居る人々でステヴストンを知らぬ者はないであらう、こゝがたゞ漁場と云ふだけであるならば、左程珍らしくもないが、太平洋沿岸に於ける最古の團体を有して居る許りではなく、小さくとも二千の會員を有し根強き日本人の部落を形成して居るこれ位な完備せる機關を持つて居る所は他に於て見ることが出來ないであらう。殿下におかせられても、早くからこの漁村の事をお耳にして居られ、御着晩の翌日即ち九月一日午後二時ユニオン埠頭から御出發、イングリッシュ・ベーを經てステヴストンに御視察の御豫定を御發表になつたのであつた。

ステヴストンの在留者が、どれだけの感激を以て、殿下をお迎へすることに力を傾注したかと云ふことは、今こゝで述べる必要はないであらう。千餘の漁船はマストに高く日本國旗をかゝげ、沖近き荒波の中に整列して、殿下幷に隨員の御來着をお待ち申上げたのであつた。

風は吹く海は荒れる、漁船はまるで木の葉の様に飜弄された、海に馴れてゐる漁者諸君にとつても決して樂な事ではなかつた。波に揉まれる事一時間、今か〳〵と待てどくらせど、それらしい船の姿も見えない、とう〳〵大時化の爲めに、殿下の御乘船が途中から引返さなくてはならなくなつたと云ふ通知を受けたのは、それから數時間を經た其日の夕方であつた。云ひ知れぬ感激を以て殿下をお迎へする準備をしてゐた人々であるから此通知に接して失望の極に達したのも無理ならぬ事であらう。

そこでステヴストン歡迎委員有志は、一方コモックス號に乘り込み、他方は陸路をホロ馬車に乘つて、せめて殿下に其の赤誠を披瀝せんと領事館へと押かけたのであつた。一行がダンスミアー街の領事館に到着したのが夜の九時、當時の領事は能勢辰五郎氏で書記生浮田郷次氏が應接したのであつた元氣な漁者諸君であつたから、浮田氏に喰つてかゝる、といふ様な有様で、自然その聲も大きくなつてゐる。隣室には殿下がお休みになつた。浮田氏の制止するのもきかず、一行の聲は益々荒くなつて來る。然しこれも私心より出でたるものではなく、全く殿下をお迎へする赤誠より出でたるものであれば、浮田氏としても何うする事も出來なかつた。隣室でこの事を御耳にされた殿

（八面へつゞく）

裸體で生れて來た人間
いつ着物を着出したか

着物を着て生れて來た人間が、一體此の世界にあつたであらうか――妙な事を心配し出したものだと思ふ方があるなら、この問題を幾千人かの志願者と競爭しなくてはならぬ入學試驗問題として提出された時の事を考へていたゞきたいものだ。

ダーヰンの進化論に知識をかりるなら、人間はあらゆる他の動物の様に、毛皮を着て生れて來た事だけはわかる。が然し、だとしても、現在着て居る様な着物を、一體いつ頃から着だしたのであらうか、その問題は解決されない。

アダムとイヴとが、禁斷の實を食べた直後、木の葉をとつて身を包んだ、と云ふ事であるが、これが記錄されて居る、毛皮以後の着物の最初であらう。

芝居の天使は、頭に冠を戴いて體に純白の衣をつけて居るが、描かれて居るエンヂエルは、羽こそ持つて居るが、身に俗人の着る様な衣服をつけては居ない。だから天國の住人は、昔も今も變りなく、裸體であるに相違ない

羞恥が着物を作らせたと云ふ者があるが、然しこれは餘りにアダムとイヴとの物語に信を置き過ぎると非難する者がある。不羞恥は着物を着た事から生れて來たと云つて居る。これはワイナーと云ふ人の說である。

リビングストンがアフリカ傳道に行つた時に眞裸體の黑人を見てさすがに若き彼の妻君に紹介が出來なかつたと見えて、彼等に着物を着る様に忠言したさうだ、黑人達も、先祖代々の尊い良風を破るのであるから、餘程苦るしんだものらしく、致し方なく彼等は白婦人の前へ出る時には、この時以來シルクハットを頭に、スリッパーを足にしたと云ふ。

そこで學者は云つて居る。着物を着出したのは羞恥からでもなく飾りからでもなく、寒い國へ住んだ人達からであると。そしてその着物と云ふのは、大抵毛皮で出來て居たのだと云ふ。

が然し最初の着物は、何れも近頃とは反對で、飾りをつけたり、化粧をしたりしたのは男であつた所が男が、野に出て獵をしなくてはならなくなつてからは、女がこれに代つて來て、今日に及んで來たが、それ以來兩者の間には、一定不變の法則が作られて、よしパジャマの流行がやつて來ても、化粧するのは女に限られてゐる。

ネオンは赤一色だけ
青や綠はその親類筋

近代の夜の都市美に、異彩を放つのは何んと云つても、ネオンであらう。あらゆる他の照明を驅逐して、女王の地位を固守してゐるネオンは、晩香坡の夜を獨占して居る。

ネオンが晩香坡へ入つて來たのは、極めて近い過去の事であるがフランスの化學者ジョルヂ・クロード氏によつて、發明されてから、漸く二十年を經てゐるに過ぎない。而もこれが街頭に飛び出したのは十年程前のことで、この間に於ける發展は驚異に價するであらう。

晩香坡の工場は、シーエヌ停車場の近くにあつて、極めて小さなものではあるが、この製法そのものが又極めて簡單なものであるから充分であると云へやう。

ネオンサインは、眞空にしたガラス管の中に極微量のネオンガスを封入し、それに高壓の電流を通ずると、あの様な冷い光が出る、これが普通の電燈に依ると、流れて來た電流を一度熱に變化させ、電燈のフイラメントを數千度に上げて、火を出すのであるから、何うしても電流が不必要な熱に變るのを防ぐ事が出來ない。所がネオン管になると、流れて來た電流が、全部光に變るのであるから電力の經濟から言へば、非常なものである。從つてそれだけに、今後發展の速度と云ふものを推量することが出來るわけである。

工場主任の語る所によれば、ネオンサインの光には、種々の色があるが、嚴密な意味で科學的ネオンと呼ぶ事の出來るものは赤一種で、靑いのはネオンガスと共に少量の水銀ガスを入れたもので、綠は其れをニス塗りにしたものであるといふ。

街頭を歩いて、これ等ネオンサインを見てゐると、時にピリ〳〵と消え入る様な光を放つてゐるのを見るが、これは不完全なもので、ガスが不純であつたり高壓器に能力以上の仕事をさせてゐる結果であるとのことだ。なほ此のサインに用ひられる硝子管は、今の所殆んど全部獨逸製であると云ふ。

（一面よりの續き）

下は、親しく一行に御引見され『本日は甚だ皆さんに對して申譯がなかつた。私は海軍々人であるからあれ位の波は何でもないが、他の者が何れも船暈にあつて行く事が出來なかつたから惡からず皆さんに傳へてください』と云ふ様なお言葉さへ賜はつて、一同は痛く恐縮して引下つたのであるが、殿下は在住日本人一同の姓名をお尋ねになつた後、日本人救恤の一端にもと金二百弗を賜はつたのであつた。事實此日の暴風は非常なもので、殿下の隨員は式部官兼有栖川宮家家令齋藤桃太郎。式部官侯爵木戸孝正。海軍大佐舟木錬太郎。陸軍砲兵中佐村田惇。外務書記官鍋島桂次郎。海軍大尉加藤定吉。の諸氏であつたが、海軍々人を除いて何れも船暈にやられ、歡迎委員の一人さへ、動けなくなつて却て殿下から御介抱を受けた程であつた。

午前十時半

オーシアンフオールス　樺山純

「おきよ！　おきよ！」
「ハイ」
「新聞と煙草盆を持つて來ておくれよ」

障子にうつる紅い日の光に、眼をさました、おみよは、だらんとした兩方の眼を細くあけて、女中のおきよを叱る樣によびつけました。

「フン！　あんまりだらしなさすぎる」

おきよは、口にこそ出さなかつたけれど、おみよの呼ぶ聲を耳にした時、十時半を指してゐる時計の針を見上げながら、心の中で斯うつぶやきました。

何時て、何うして、三人の子供達が、學校へ出掛けて行つたか、そんな事は、おみよにとつては何の關係もある事ではなかつた。

女中が持つて來た煙管の管に、器用に煙草を丸めて、青い煙草を吹いてゐる彼女の胸には、昨夜すつかりとられて仕舞つた、表座敷の賭奕場の光景が、フイルムになつて廻つて居るのでした。

金に不自由を感じない彼女にとつては、たゞ昨夜の勝負が、不利に終つて居るにしても、財布の底をたゝいて、やけに投げ出した二十圓が、不運にもまた期待を裏切つて、他人の手に握りしめられてみへも外聞もなく、オイ／＼と泣き出した常吉爺さんの事を思ひ出すと、堪へ切れないオカしさが、紅い唇をふるわす程の餘裕はあつたのでした。

「ウフ……」

突拍子もない笑ひ聲に、むつくり起上つた夫は、

「何んだい、獨り笑ひなんかしてさ」

まだ覺めきらぬ兩方の眼をこすりながら云ふのでした。

「ナンにもありやしない、あんまりあなたがお目出度いからさ、それに昨夜の常さんの泣き面を思ひ出したら、誰だつて笑はずにはいられやしない」

「ナーンだ、同情のない事を云やアがるぢやないか」

「そりや致し方ないさね、あなたの樣な、お目出度と違ふからね、合圖の目くばせを、とんちんかんにのみ込んで、切角白の金を握つては、あべこべにやられてさ」

「そりやお前、取られる者がなかつたら、取る者もなかろうさ」

「いやに、いゝ氣前を見せるが、あなたも常さんの樣になつたら、オイ／＼と泣く部類だからね」

「ナンと一度も、泣いた事がない樣な事を云ふぢやないか妹のおすへさんが、切角生んだ子が、死んでいたと云つて、女と云ふものは始末にをへないものだと思はれる程に泣いたお前だ、他人の事なんか云はれた義理かい」

床の中で、夫婦は、たわいもない話をして居ります。日は已に高くのぼつて、彼女が鏡臺の前に坐つて、あだつぽい姿を鏡にうつしながら、化粧を始める頃には、時計は已に十二時をつげやうとして居るのでした。

乞食の子も三年たてば三ッになる――次から次へと、あはたゞしく生んだ三人の子供も、彼女が斯うした生活をして居る間に、成長して參りました。長男をお腹に宿していた時でした。二男として生れた夫と共に、長兄の財産を盜み出して、財産分配の不平をならべたて、血で血を洗ふ程の、兄弟爭ひをした經驗を持つて居る彼女等でした、此の夫婦に似た三人の子供は、更に放縱な女中獨りの手に育てられ、父母の愛を奪はれて成長して居た酬ひの爲めに、學業に勵む氣力もなく日々生氣のない寄ピヨヴタンの樣な顏をして漸く義務教育を受けてゐたのでした。

親としての思慮なき愛は、畢竟人間の魂を奪ひます。何うしておみよが、斯の樣な生活に入つて仕舞つたか、その原因を究べて見れば、それは矢張り彼女の父母が、兄弟のうち、タッた一人の女の子として生れた彼女であつたが爲めに受けた盲愛は、彼女を同じ盲目の女として成長せしめたのでした。

そして母になつての今も、敬へられた昔の一夢の樣な生活に基をたてゝ、夫の兄から、奪ふ樣にして分轄して貰つた財産を、生活の資本としてその日／＼を暮して居たのでした。

流れ出る泉の水も、いつかはかれる時が來るやうに、賴む財産も今は殘り少なくなつて參りました花散り失せて新に實られる世の中、彼女の周圍にあつた幾多の友も、だん／＼その數を減して殘るたつた一つは、悔恨の夢物語でした。

斯うした時、延びる新芽は過去への追想であります。そうしてその追想は、彼女等を相場に手を出させたのでした。あせりながら明日を夢みる生活程、慘めなものはありません、然し此の生活に結びつけられたものは彼女等夫婦だけではありませんでした。

叔父を賴りに、朝鮮へ渡つた長男が、アカシアが咲き、ポプラの風にそよぐ、漢江の邊りに於て生活戰線に活動する氣力もなく、あへなくも鐵路の錆となつたのは、彼が朝鮮へ渡つてから二ケ月の後でした。

そして長女は――彼女はいま、天涯に家なき生活の主人公として、さよならを告げやうとして、うすきたない木賃宿の一室に、もだへ苦しんで居るのです。が然し彼女等の兩親は、幾十年かの過去の生活に、一厘をも與へる事の出來ない、今日の窮迫に、老ひの身を圍まれて身動きさへなし得ない狀態にあるのです然も友を呪ひ、兄を怨んで、朗かに訪れた春の中に、小さき五尺の體を横へながら、天に向つて唾して居るのでした。

誤つた教育の電波は、流れ伴つて、敗殘の子孫を世に送り出します。考ふべきは兩親の兒童教育に對する態度ではないでせうか。私は驚く可き此の事實を同胞の前にさゝげ、考慮を煩はしたいと存じて居るものがあります。

和田重のマラソン

スポート昔ばなし

山本倫由

今日の如くスポート華やかならざりし、明治四十年代のことである。

極北のジプシーとして過般本紙にも紹介された、アラスカの金山探險家である和田重次郎が、今尚スタンレー公園の入口に殘骸を殘してゐるホースショウ・ビルヂングに於て、白人選手を相手に廿哩のマラソン競走をやつた事がある

何しろ二十幾年か昔の事であるから、相手の白人選手の姓名も今では記憶にないが、何んでも佛蘭西の元帥の如くに、胸に燦爛たる勳章をやたらにブラ下げてゐたところから考へて見ると、定めし當時その方面に於て名ある人物であつたには相違ない。

最初和田は五十哩の競走を申し込んだのを、相手の方で二十哩に値切つたとの事であつたが、何れにしても、當時の晩香坡に於ける日本人スポーツマンであつたレスラアの松田某を別としては、このマラソン競走が在留同胞の血を湧かした日白對抗競技の濫觴であつたやうに思ふ。

さてもこの時和田重次郎の扮裝は、講談式でゆくと頗る面白いのだが、眞黑の運動服に短い毛脛をむき出しの、あまり風采のあがらない格好で現はれ出で、ピストル一發でスタートを切るや、韋駄天の如く走り出すかと見てゐると、何の事はない大阪の天神樣のお祭りに大きな山車を曳き出す牛の如くに、ノッソリ／＼と歩み出したものだ、相手の白人選手はと見れば、胸にきらめく幾十の勳章をチャラン／＼と鳴らしながら、宛然荒野を驅けゆく牡鹿の如く颯爽たる姿はまことに勇壯の極みであつた。

だが當時アラスカ探險家としてその高名は米國及び加奈陀に轟き渡つてゐた和田重次郎である、多數の白人が彼に金を賭けてゐると見えて、水を入れたバケツをぶら下げた者や、水に濡らしたタオルを持つた者など多數の白人が彼のうしろから追ひ立てるやうにつひてゆくので、觀客席の日本人ファン一同も氣が氣でない、わい／＼と騷ぎ立てるところまことに悲壯の極みであつた。

ところがわが和田重次郎少しもあわてず、急がず、悠々閑々として、そこを風が吹くかと云ふ格好でノッソリ／＼と牛の歩みをつゞけてゆくところに、遉にアラスカの氷原を横斷してゆくところのパフォローの面影があつた。

さて十哩、十五哩と進むにつれこの白人選手の牡鹿の歩みが次第々々にのろくなつてくるに反して和田の牛の歩みは少しの衰へもみせず依然として同じ歩調を崩さないのには、流石の觀衆一同も驚いたものだが、それでも結局惜いところで和田の負けとなつて二十哩の競走は終つた。

だがこれが和田の申し込み通り五十哩の競走であつたなら、この佛蘭西元帥迚も和田の敵ではあるまいと當時一般の評判であつた。

東郷大將歡迎と日曜日

日曜日は靜かに過ごさなくてはならぬ、と云ふ法律がある。これをロードデー・アクトと云つてゐる。

何故日曜日は靜かにしなくてはならないのか、それは基督教から來てゐる。つまり神樣が六日の間に萬物を創造し終へて、七日目に休んだ、と云ふのである。だから七日目は、造つて貰つた事に對して、感謝の意を表さなくてはならぬ――と誰かゞ考へ出したのである。

然しこの法律も、だん／＼その時の流れに支配されて、象牙の塔から拔け出さうとしてゐる。人間生活の複雜さが、已むなくさうさせてゐるのである。さてそれがいゝか惡いか、と云ふ事になると、議論になつて來るのだが、拘束は決して從順を産んでは來ない、そこに識者の苦心があらう。

明治四十三年、東郷大將が英國からの歸途、當地を通過されたについては、當時の市長であり、又現在も大晩香坡二代目の市長をつとめてゐるテーラー氏の盡力に負ふ處甚だ大きい。

さて東郷元帥が、愈當市を訪問される事になつた、と云ふので市ではグランビルとロブソン街の角にあつたダッチ・グリルに一人前四弗の料理を命じ大歡迎晩餐會を開くと云ふ事になり、出席希望者を募つたものである。その日が運惡く日曜日であつた。

この事を耳にしたオードラム、グレーと云ふ樣な人々は、眞赤になつて怒り、國賓を遇するに日曜日を以てするとは何事だ、と市會へ抗議を申込んだのである。

斯う云はれて見れば、テーラー市長も一寸いひわけが出來ない事になる。ギルパトリック市會議員なぞは、正式なものにしなければいゝぢやないか、何も夕食を誰と何處で日曜日に食べた所で、不都合はなからうから、とそのまゝやる方に贊成してゐたが、後がうるさいと云ふので、ローカル・オフイサーだけで、心ばかりの歡迎晩餐會を開いたものである。これでは何うにも東郷元帥に對して、顏が立たんと云ふので、テーラー市長は、急用が出來たと云ふ事にしてシアトルへ行つてしまつた。

翌日語學校で日本人側が歡迎會を開き、永尾唯一氏が在留民を代表して歡迎文を朗讀したが、この時の東郷大將の答辭が約二分間であつた。尤も滅多に口を開かない大將の、二分間の演說なぞは、後にも前にも、聞く事の出來ない長いものであらうと、後で練習艦隊を引率して來晩した、岩村司令官の話である。

百万弗の遊擊手
ローイ山村の生立記

伊太利が生んだ、世界的聲樂家カルソーは、年老ひた兩親の間に生れた、九番目の子供であつた。

彼は十一歳の時ネープルスに於て、クアイヤーとして歌つたのが最初で、一九二一年八月、四十八歳で世を去るまで、伊太利人が持つ情熱の聲樂家として、世界の晉樂家から羨望の眼を以て見られて居た。

そこで産兒制限反對論者は云ふのである。カルソーを見ろと。そして若し彼の兩親にして、産兒制限を行つて居たとしたら、恐らくカルソーは生れなかつたであらうと。尤もな說である。

ローイ山村は一九〇七年の生れであるから、今年滿二十四歳になる。第三街聖公會のファウンダーたるパトリック夫人を、兄のピーバーと共に、始末に終へない幼稚園兒として惱ました彼、羊の年生れに似ぬヤンチャ坊主であつた彼―その彼も、二十四歳の『戀を知る頃』となつた事を思ふと、パトリック夫人にあらずとするも、無量の感慨があるであらう。

父を萬太郎、母をひでと呼び、十二人の子福者の中に、ローイ末記は八番目の子供として生れた。

彼も又カルソーと同じく、もう少し時代が遅れたなら、産兒制限の風潮に支配されて、此の世に出て來る事が出來なかつたかも知れない。幸ひな時代が、彼を此の世に送り込んだのである。そこに又産兒制限反對論者の歡聲が擧げられる事であらう。

ローイが、最初にボールを手にしたのは、嚴密に云へば彼の十三歳、日曜學校野球團に加はつた時からである。然し野球狂と迄云はれた彼の兩親は、その母の體内にある間から、名遊擊手としてゞはなくとも、ボール投げの稽古を許して居たに相違ない。云はゞ彼れは、球界の王座を占める運命の子として生れたのである。

兄の健治は今朝日軍に加はつて活躍して居るが、引退して以來、餘り表面にその名を知られて居ない政喜、義雄及び只雄の三兄も、嘗てはキチラノ在住青年によつて組織されて居た、大和野球倶樂部に、重要なる地位を占めて居た事を思ふと、今日アローの戰ふ毎にスタンドの蔭から、聲をからして應援して居るのも、又意味のない事ではない。

歴史はキチラノ青年の球界に於ける重要性を說いて居る。朝日の名捕手安居義一、山村健治を筆頭として山本俊夫、川村俊夫、安居義夫、北村末彌、山本藤弘、伊藤信一、伊藤準治、早川政德等々、數へ來れば限りなく、嘗ての名人の名を連らねて來るが、彼等が何れもキチラノ産である事に、多大の興味を持つのである。ローイが今日をなしたのも又、この周圍の空氣の然らしむるもの多大であらう。

だが然し彼を、より以上激勵して居る所のものは、彼の父である。太陽のない日はあつても、恐らく彼を、スタンドに見ない日はないであらう。チッと愛兒の動作に、眼を深くそゝいで居る彼―彼は愛妻を喪ふて以來、澤山な子供を我手にかけて育てあげた勞苦の、漸くに酬ひられた、と云ふ樣な歡喜に浸りながら、我兒の爲めに聲援して吳れる人々の間に混つて、感謝の涙に咽んで居るのである。これは年老ひたる彼にとつては、こよなき滿足であらう。

アローは、ローイを迎へて以來福運につながられて、勝ち續けて居る。幾千人を容れるあの廣大なスタンドが、全く人に埋められる頃、破れる樣な喝采を受けながら朗かに仰いで出て行く、小さなローイの姿、それは日本人が誇る感激の純情に支配されて流す涙が語つて吳れるであらう。

ゲームが終つて、彼がアローのユニフォームを脱いで球場を出る時、そこには妹達が待ち構へて居る。

「ハロー●ローイ〜」

小さい彼は、背高い人々に圍まれて身動きも出來なくされるのである。彼の始終笑つて居る顏、無邪氣な天使の樣に、輕くはね廻る彼―彼は周圍に集まつて來る、美しい女の顏に出會ふと、ビックリした樣に逃げ歸つて行く、惠まれたる者よ、彼は祝福されたる遊擊手である。

然しこの華やかな半面に、彼には寂しい一面がある。それは母の永遠の別れをしなくてはならなかつた彼、それは泣いても歸らない歎きではあるが、斯うして彼の名が廣く知られゝば知られる程彼の寂しさは增す許りであつた。だが長い勞苦に、疲れ果てた父の限りない滿足の顏に出會ふと「やるぞ襲ッ」彼の心には一段の緊張さが加はつて來るのである。

日曜日が來ると、彼の家は若い人々の顏で滿たされる。こゝでも彼は、話題のヒロインとして、アスレチックに於ける以上の活動を强られるのである。恐らく彼程に友を持つものもないであらう、やがて來るであらう結婚の日こそ、彼の幸福なる生涯の序曲が、これ等の友のうちに奏でられるであらう。愛のキューピーは、何處をスチールするか然したゞ一人、幸福な赤いハートの矢にたほれるもの、それが誰であるにもせよ、恐らく宇宙に於ける最大の幸福者であらう、と胸の高鳴りに耳を傾けて居る美しい者のあることを、特記しなくてはならぬであらう。

そは若人の問題として、よき父を持ち、よき兄を持ち、そしてよき姉妹を與へられた彼は、天下たゞ獨り許された幸運兒であると云へやう。

―いま中野保險事務所の一事務員として、中野氏の信用を一手に受けて居る。遊びたい盛り、費ひたい盛り―だが父に月給袋を渡して、僅に三四弗の小遣を貰つて、それで滿足してゐる彼である。よい子を持つた親の幸福を、記者は萬太郎氏の一身の上に感ずる（エム●アイ生記）

新夫婦日記（一）

佐々木邦

第一回　縁といふ奴

もしあの時、下駄が覆れなかつたら、僕は結婚しなかつたらう―否、少くとも、綾子ではない他の女と結婚してゐたらうと信ずる。偶然といふ氣まぐれものは人一生の運命を唯瞬刻の間にきめてしまふ。

當代名士の一人に數へられる老牧師某君の青年時代に斯ういふ失敗的成功がある。或時この某牧師が某教會に於て某長老によつて某婦人傳道師に紹介されたと想像して戴きたい。

「この方がお聞き及びの何々教會の牧師何の誰さんでございます。この方は何々教會の婦人傳道師何の何子さんでございます」

と言つて紹介者が軍配を引くか引かないに、見合つてゐた双方は、何分宜しくとか何とか、とお定りの挨拶を述べながら、お辭儀をした途端、何うした機會か、某君と某女はゴツンと美事に鉢合せをしてしまつた。

「や、これは何うも失禮致しました」

「まあ、何うも飛んだ不調法を致しました」

と、若い同志ではあるし、場所柄も場所柄、殊に鉢合せのことであるから、二人とも顏から火が出たやうに眞赤になつてしまひ、傍の見る目も氣の毒だつたといふが、この時長老少しも騒がず、徐ろに白髯を撫しながら、

「袖振り合ふも他生の縁といふ況して鉢合はするは今生の縁だ。宜しい。一羽の雀と雖も神樣の御意なしには地に落ちぬと申す。御兩人の間に拙者が及ばずながら媒介の勞を執りませう」

と受け合つたか何うか、まさか然うも手っ取り早く縁談が進みはしなかつたらう。が、然し、兎に角このゴツンコが原因となつて、この兩人の間に交際が始まり、その後ミストル●コツンコとミス●コツンコとがミストル●コツンコメーカーの媒灼に依つて結婚式を擧げ、現に數人の子のパパさんとママさんになつてゐることだけは誇張のない正直な話である。

僕の縁談の起因もこのゴツンコ氏夫妻のに能く似てゐる。想ひ起せば今から八年前、學生時代のことである。僕はある夏親友日高君と共に東海道の或海岸へ避暑に行つた。そこは恐ろしく松の樹の多いところで、俗名を千本とか千本濱とか言つたと記憶する。その海岸から町へ出る野路に踏切がある。といへば、うむ、あの滅多に汽車の通らない踏切かと、知る人ぞ知る。沼津へ行つたことのない人は一人も知るまいが、あの踏み切こそ淸野淸コツンコの場所である。

或日の夕刻、その日はお師匠さんの日高君に何か差支があつて、僕一人、大きな圖體をして、淺いところで面被泳ぎの稽古をやつて、さて、宿に歸らうと、その踏み切へさしかゝつたと思つて貰ひたい

―その後綾子と二人で、もう一度あの海岸へ行つて見たいと始終言つてゐるけれど、どうも機會がない。それは然うとして、その節その踏切へさしかゝつた時、向ふから綾子とその兄がやつて來たと思つて貰ひたい。何は餘り度々で恐縮だけれど、當時兄の方は何處かで見覺えのある顏だと思つたが綾子の方は未だ半面の識もなかつたと今一度思つて貰ひたい。この兄妹と踏切の上で行き違ひざま、どうしたハヅミか、僕は忽ち下駄が覆れて、あつと思ふ間もなく、美事にその場へ投げ倒された。夫れも自分一人が躓いた丈けなら未だ始末が宜いが、折から摺れ〜〜の距離にゐた綾子が傍杖を喰つて可愛さうに、これも美事に跳ね飛ばされたのである。

何ういふ理由か、何時想ひ起しても、その際の光景は昨日のことのやうに鮮かである。慌てゝ起上つた拍子に、不圖富士山が目に入つたことまで未だに忘れられない。いや、何うも體裁の惡かつたことといつたら！

「何うも失禮致しました」

と僕が跛足を引きながら進み寄つた時、綾子は眞赤になつて着物の埃を拂つてゐた。

「何うも眞正に失禮致しました」

「お怪我はございませんか？」

と僕は幾度もお辭儀をした。

「いゝえ、少しも……」

と綾子は會釋した。それも如何にも據ろなさゝうに見えた。さうして宛然援兵を乞ふが如くに兄の方へ目を外らした。

「君こそ何うですか？や、膝から血が泌むでゐます」

と兄貴が顏を長くした。折りふし夕潮を浴びに行く人、浴びて歸る人のゾロ〜〜通る時刻だつたので、猿股を提げた彌次馬連中が、物見高く、前後左右から群り始めた。

何うも失敬致しました一點張りで、頓首再拜、横鼻緖の切れた下駄を足に突つかけるが早く、跛足を引き〜〜、這う〜〜の體で影を暗ましたのは、何うやら走馬燈の按摩のやうで、今考へ出しても、我ながら腹の立つほど馬鹿々々しい姿であつた。

「おい、居るか、日高？何うも今日は飛んだ目に遭つて來た！」

「だから一人はよせと言はないこつちやない。又ブク〜〜でもしたんだらう？」

「然う毎年ブク〜〜して堪まるもんか。實は陸上で大滑稽を演じて來たんだ」

といふやうな次第で、宿へ歸つて一伍一什を日高君に物語ると、先生何事に對しても立場を第三者に執る人間で、面白い、其奴ぁ面白いと僕の失策を頻りに興がつてゐたが、

「しかし到底仁和賀式だね。馬から落ちたとでもいふんでなくちやロマンチックでない。さうしてその女といふのは美人かい？」

「美人とも。明日見せてやる」

と僕も少し意地になつた。

氣味の惡い話

薄暗の中に横はる死體

「オーケー」

エリス老人は、今、自分の手によつて死刑を執行したワイの體を檢査しながら、全く心臟の鼓動が止んで、極樂淨土でなければ、地獄の底に突き落されてゐるに相違ないと朗かに診斷を下した醫師の、耳もとでさゝやく聲をきいて、係の看守へ聲をかけた。

塔の頂上について居る電燈の光で、辛ふじて見別る事の出來るかこの中には、二ツの體が眞黑い布で顏を覆はれたまゝ、ぶらさがつて居る。

チカツと刃物が光るとヅブツと太い綱が切り離されて、ワイの體が、ぐにやつとなつて、二人の看守の腕に抱かれる。

「すんだ！」

エリスは、さすがにそれが仕事ではあるが、氣味の惡い、ため息をつく。

外には霧の樣な雨が降つて居る人はみんな無言だ、新聞記者がかけつけて來て、ワイが地上に遺したであらう、最後の言葉をきく。今日の特別ニュースとして、百パーセントの興味をそゝらうと云ふのである。

「ぢやア、これでよろしい、直ぐに引取つて貰いたい」

典獄らしいカーキー服の役人は斯う云つたまゝ外へ出て行つた。殘つたのは、あの廣い物置小舍の中に、二ツの死體と、蒼白くなつて立つて居る私とだけである。

想像出來るであらう。——體の重みで、思ふ存分引きながめられてゐる首、太い麻繩に、傷つけられて、赤く血をにじませて居る頸そして長い髮を亂して、無慘にも汚れきつたキャンバスの上に、ごろりと轉がつて居る二ツの死體、樂ではなかつたであらう、齒を喰ひしばつて、白くむき出して居る凄い顏を。

邊りにはいろ／＼の耕作用具が置かれてあり、このたゞ廣いホールの中に、僅か五燭程の電燈が光つて居るのである。幽靈が出て來なくつても、充分に恐怖を感ぜしめる空氣が漲つて居る。その中に背中を向ける事も出來ない程の恐ろしい氣持に支配されて、身動きも出來ずに突ッ立つて居る私が居る。——この場面を想像出來るであらう。

誰か來てくれッ——心の中で叫んで居るのだが、聲に出す事の出來ない氣持、眼をつぶれば、更に想像の恐怖が、より以上の高度で襲つて來るのに、已むなく二ツの眼を見開いてじつと死體に注いで居る顏、回想を彼の生前のニコやかな姿にかへさうとしても、かへらない、眼前の彼、幻想を許さない現實——。

ガタン——吹きまくる冬の風に何か倒されたらしい外の音、ギョッとして縮み上つた私、黑いキャソックに兩手を組んで、白蠟の樣に蒼ざめた顏——それを諸君には想像出來るであらう。

いまにはね起きて、飛びつくかも知れない、とも思はれてならない、二ツの死體の外には——いや今だつて、野中に建てられた一軒家の中で、この當時の事を思ひ出すと、外の暗が、俺の小さな胸を壓へつけるのである。

暑い夏の夜の物語——だがそれは餘りにも、涼し過ぎる話ではある。（岳生）

記者曰く——こんな樣な氣味の惡かつた話をお持ちになりませんか。何うかお漏らし下さい。どなたでもどし／＼投稿して下さい。

記憶はよみがへる

二十年前の今月

△二日　米國大使館附武官海軍中佐平賀德太郎氏來晩、佛敎會堂に於て雄辯を揮ふ

メーン街二二八「菊の家」女將近村やゑ子午前十時半狂漢の爲めに刺さる

△九日　工藤久治、岡本忠雄の兩氏「曙めしや」を開業

△十日　パウエル街商業組合事務所に於て「木の子會」開かれ、順鹿、紫灘、華水、松峰、自若、笛水、春江、衛門、半佛、嶺水、波韻、の諸氏集まる

△十日　シアトル高左右氏南タコマに於て飛行機を操縦す

△十八日　ペンダー街賭博場に於て日本人六名拘引さる

△二十三日　本派佛敎會堂落生盛大に祝賀會開催さる

△二十六日　鹿兒島縣人平留熊氏は「縊死する考へ故後は宜しく賴む」との遺書を血書し姿を消す

内田外相は本日午後六時阿波丸にて歸國の途美府に立寄る

△二十七日　平留氏は北晩香坡のケラニー・ハウスに投宿し後ホテルの先の藪の中にてピストルにて自殺を圖つたが死にきれず白婦人に發見救助された、其時彼は「神の道を信じて變る事なくんば神は我に白婦人を與ふべし」などゝ口ばしつゝ居たと

△三十日　此の頃土地賣買熱非常に盛になり現在救世軍大尉の山田昌則氏のフォート・ヂョージの開拓、福永事務所の市内の土地投資などの廣告大々的に新聞に滿載さる

コーツネー勸業共進會出品の日本人農作物は非常な好評を博しつゝあると

子を見ればわが命は永久に生くる證のごとくめでたし

わが子等の春日のごとく輝ける瞳をみれば思ふことなし

わが膝に子のすがる時おはけなくマリアのごとき心わくかな

もの云はずたゞ一心にあそぶ子を見れば心のさびしくなりぬ

移民地物語

墓場の姉弟

盆の時節が廻つて來ると、姉のみち子は必ず次郎の手をひいて、マウンテンビュウの墓地に詣られて居る、亡き父の墓標の前に跪つて、さめ／＼と泣くのでした

一年が廻つて來ると、折角去年潔めた墓も、深い草に覆はれて仕舞ひました。二人は今年もその一本々々の草を、力なく引拔いて居りました。

「感心な姉弟だ、近頃の若い者にも似ぬ感心な姉弟だ」

同じ墓詣りをして居る人々を、そんなに感心させた事でありませうけれども二人にとつては、それは他人の問題ではありませんでした

一昨年の事でありました、フトした病が源で杖とも柱とも賴む父が、急に他界してからは、みち子たちは一家離散の運命に強いられて、母を助ける爲めに、市內であるとは云つても、お互に一週一度の外は會ふ事の出來ない、ハウスウォークの不自由な生活をしなくてはなりませんでした。

一週の終りが來ると、みち子と次郎とは、主人から貰つた幾何かのお金を持ち寄つて、淋しい母を慰めて居りました、これが三人の母子にとつては、唯一つ地上で與へられた樂園でした。

禍福は糾ふ繩の如しと申します禍のみの世界もなく、福のみの生活もないのは、世の常でありませう、昨日の禍が轉じて今日の福になり、今日の福はやがて又禍をかもすかもわからない現實の生活はそれが、自然であるかも知れません。父を失つて淋しい母子の生活の上に何うにかして育て上げたい幸運への努力が、やがてより以上の悲劇を生もうとは彼等も豫期して居はしなかつたに相違ありませんけれども今かたく閉ざされた我が家のドアーの下から、引出された一片の紙は、此の可憐な姉弟を孤兒にして仕舞つたのです

「みちさん、次郎さん、あなた方には眞實に濟みません、けれ共お母さんは、何うしても遠い所へ去らなくてはならなくなりました、此の世であなた方に會ふ事は出來ないでせう、でも母はあなた方の成長を祈つて居ります。いつもの樣に、あなた方は此の惡魔の樣な母を慰める爲めに來られた事でせう、でも致し方ありません、では急ぎますから。くれ／＼も體を大事にして下さい」

父を喪つて一年もたゝない今日、父母に生き別れなくてはならない寂しさの、胸にたゝみ上げて來るのをとゞめる事も出來ず、二人は相抱いて泣くより外に慰めはありませんでした。

何うしたんでせうお母さんは——語りあつては見たが、それは二人には解き得ぬ謎でした。致し方なく二人は、附近のレストラントで夕食を濟まし「また次の日曜に會ひませうね」斯う云つて寂しく別れたのでした。

それから幾月かを經過致しました。けれども母の行衞は尋ねる二人には無駄な勞苦でした。斯うして又今年も盆を迎へました。二人は又手を携へて父の墓前に參り、長く延び上つた草の一本々々を引きぬきながら泣いてゐるのでした

「つまらないわねエ、お父さんさへ生きてゐて下さつたら……」

思ひ出しては更に熱い淚をながさなくてはならない彼等の願も、それはたゞ、ぐちに終るのでした。

父が他界してから三度目の盆が參りました。又此の年も同じやうに、次郎は男泣きになきながら、墓場の草をとつて居るのでした。けれども姉のみち子は、母と同じ樣に、何處ともなく姿を消して、次郎は賴るものもなく、獨りこの父の墓場を守らなくてはなりませんでした。

人生の悲劇の外に、織り出された一篇の詩——次郎はとり殘された寂しさをもわすれて、來る年も〳〵、父の墓場を潔めて居るのでした。

オンリー・ナウ

「只今」

表のドアーが、ガラ／＼つと開くと、奥の方で

「お歸りなさいまし」

ナンといゝ狀景ではありませんかそして玄關の障子がサラ／＼つと開いて、半腰をかゞめた若妻が、ニコツとして顏を出す

「暑くておつらかつたでせう」

と來る。只今、が誘ふエロである成る程、こんな聯想の中に「只今」が置かれたとしたら、「只今」は恐らく世界中の忙しさを、一手で引受けなくてはならぬ。

そこでこれを西洋にきいて見る表のドアーをガタンと開けて、奥のルームで仕事をして居るらしい細君に聲をかける

「ハロー・デアー」

そしてピチャ／＼つと唇を吻ひ合ふ音がして終る。

◇

東京の商科大學を來年の三月に卒業すると云ふ青年學生、——暑中休暇を利用して卒業論文の材料蒐集にやつて來た。知人から紹介されて晩香坡滯在の數日を白人家庭に居候として住込み、今丁度外出先から歸つて來て玄關に立つた、と想像してほしい。

彼は大抵の場合、チョッキのポケットに豆字典をしのばせて居るのであるが、今日は生憎洋服を着替へたので持つてゐない。やさしい聲が「あらお歸りなさいまし」と彼の「只今」に答へてはくれない事はわかりきつてゐるが、東洋の禮儀をわきまへてゐた彼は頭をなやました、「只今」の飜譯問題である。さて何と云つたものかしら——考へて見れば見る程、わからなくなつて來る。東洋のタンキが彼の蠻勇をふるい起した。日本人の對面を保つ爲めに、東洋の道德の美點を示す爲めに、彼は心得て洋服の襟を正した。

◇

ドアーをすッと開けた。ケッチンのドアが開いて、ニコ／＼とした女主人公の顏が出る。青年學生はその顏に云つた、彼の最高の智識を絞つて——

「オンリー・ナウ」